毎月一回発行

Oita Prefectural Hospital
大分県立病院 みなさんと診療科をつなぐ架け橋

2023年　12月　第 185号

県病医療ニュース

〒870−8511　大分市豊饒二丁目8番1号　TEL097−546−7111（代表）内線7712:県病ニュース係

※当ニュースへのご意見・ご感想は県病ウェブサイトをご利用ください。

大分県立病院ウェブサイトはこちら

臨床検査科 病理部

病理検査室のティッシュバンク

近年では特に肺がんを中心にがんの増殖遺伝子に対する薬が多く開発され、多くの方が治療による恩恵を受けています。この治療にはがんの増殖に関連する遺伝子を詳細に検査する必要があり、採取されたがんの一部の遺伝子の質が重要視されています。がんの遺伝子検査に多く用いられる検体は病理標本を作製する際のパラフィンに埋め込まれた組織ですが、遺伝子の保存が時に良くないことがあります。本当に遺伝子の保存が良く、詳細な検討が可能なのは生の標本を-80℃に凍結した検体で、ごく少量でも詳細な検討が可能になります。当院病理検査室では遺伝子検査等を目的として生検した標本など、生標本での凍結保存を進めています。保存された検体はシステム上で管理され、診療科の医師の要望に応じて提供できる体制を整えつつあります。このような保存提供体制は「ティッシュバンク」と呼ばれ、今後発展していくことが期待されます。

がんの小片はこの様なチューブに入れて凍結保存します。著しく小さな小片でも新鮮で保存が良ければ詳細な遺伝子検査ができます。

凍結した標本を薄く削って染色を行い、がんが確実に存在する小片を見つけます。その後，溶かして，その小片をピンセットで取り上げて保存します。

（臨床検査科病理部　部長　卜部　省悟）

※掲載内容の詳細は各科外来・各病棟でお尋ねください。

（裏面をご覧ください）

毎月一回発行

緩和ケアセンター

2023年　12月　第 185号

緩和ケアとは

緩和ケアと聞くと、“がんの終末期にうけるもの”というイメージをお持ちの方も多いのではないでしょうか。

しかし、がんによる苦痛には、①がんそのものや治療の副作用による**身体的苦痛**、②がんと告知された時や転移・再発が分かった時にうける衝撃などの**精神的苦痛**、③経済的な問題、仕事や家庭への影響、今後の人生設計が変わってしまうなどの**社会的苦痛**、④『なぜ自分が・・・』、『私は何か悪いことをしたのか』など人生そのものの意味や、自分の存在意義などを考える**スピリチュアルペイン**、の4つの側面から構成される全人的な苦痛（図1）があるといわれており、それらの苦痛は決して終末期のみに認められるわけではなく、がんの診断時から生じます。そのため、全人的な苦痛に対する緩和ケアは、がんの診断時から必要であると言われています（図2）。

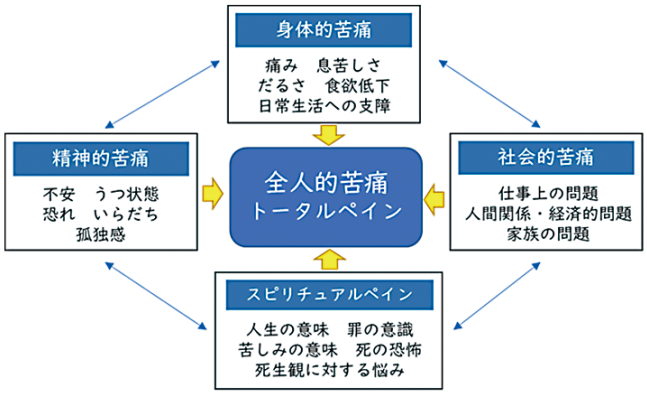

図1　全人的苦痛

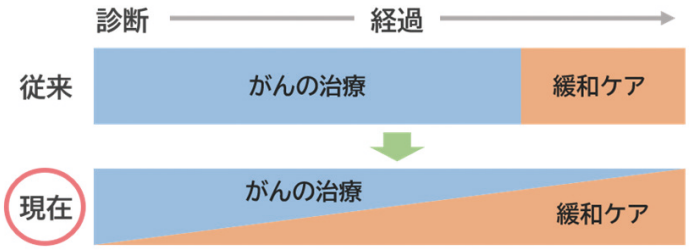

図2　がん治療と緩和ケア

緩和ケアセンターでは、患者さんとご家族が抱える問題に早期から対応できるように、がん看護専門看護師が、がんの診断時から医師の説明に同席し、多職種・他部門と調整の上、それぞれの患者さんに必要な支援を届けられるよう努めています。

また、がん診療に携わる医療従事者が基本的な緩和ケアを行うための教育、院内および地域での緩和ケアの普及活動、切れ目のない緩和ケアを提供するための地域の病院や在宅医療機関との連携も行っています。

強い痛みが続く、気持ちが落ち込み眠れない、などの症状が続く患者さんに対しては、医師・看護師・薬剤師・管理栄養士・公認心理士・ソーシャルワーカーによる緩和ケアチームが、主治医や多職種・他部門と連携し、苦痛の緩和を行っています。

（緩和ケアセンター がん看護専門看護師　吉見　千絵）

緩和ケアチームメンバー

看護師ほか医療スタッフの臨時職員を募集しています。詳しくはこちら

※掲載内容の詳細は各科外来・各病棟でお尋ねください。

（裏面をご覧ください）